



令和5年10月20日

報道関係者 各位

市川市教育委員会
生涯学習部長 板垣 道佳

国登録有形文化財(式場隆三郎家住宅)登録プレート授与式について

市川市国府台6丁目の式場隆三郎家住宅が国の登録有形文化財として登録されたことを受けまして、下記のとおり登録プレートの授与式を執り行うことからお知らせします。

記

1. 日 時

令和5年10月26日(木)午後2時30分～3時

2. 場 所

式場隆三郎家住宅(国府台6-1-14)

3. 留意点等

(1)当日は室内の内覧を予定しておりますが、現在もお住まいになっているプライベートな空間となりますことから、写真撮影については、被写体を限定させていただくこととなりますことをご承知おきください。

(2)駐車場をご利用の場合は、下記までお問い合わせください。

【問い合わせ】

生涯学習部考古博物館長 杉山 元明

TEL 047-373-2202

式場隆三郎家住宅



外観 令和元年（2019） 撮影：日塔和彦氏

式場病院（当時は国府台病院）の創立者・式場隆三郎は恩師である柳宗悦（1889-1961）や新潟医学専門学校（現・新潟大学医学部）の同級生吉田璋也（1898-1972）らの影響で、早くから「民藝」に深い愛情を寄せ、同人たちとも交流していました。

式場は、静岡脳病院等での院長職を経験後、昭和11年（1936）に独立経営の国府台病院を創設しますが、この数年後に民藝運動の中心メンバーに委ねて病院に隣接する形で自宅を建築することを決意します。柳宗悦、濱田庄司（1894-1978）を中心に、河井寛次郎（1890-1966）や寿岳文章（1900-1992）らが関わり、住宅は昭和14年（1939）3月に竣工しました。濱田、柳、河井の住宅、そして日本民藝館の竣工を経て建築された同住宅は、同人たちの間で「民藝理論を今までの中で最も高度に実現した」建築と評されました。

式場はこの住宅の完成をもって、日本民藝協会の機関誌『月刊民藝』（のちに『民藝』と改題／発行期間：1939～1946年）の刊行を発案し、民藝運動に本格的に携わることとなります。



外観 昭和14年（1939）



1階応接間 昭和14年（1939）



式場隆三郎家住宅の建築的特色：川島智生氏は住宅の特色として、従来の民藝建築の三要素（洋風・和風・東洋風）が表現されている点に加え、天井高さや床高さを操作することにより空間に醍醐味を加えた点、他の民藝建築に比べ和室が少なくほぼ洋間で構成されている点を挙げています[川島2010]。

設計者の住宅や日本民藝館との共通の意匠・造り：たとえば、朝鮮張りの床と箱階段は河井寛次郎邸と、軒下の出桁造りと化粧垂木、大谷石の多用は日本民藝館・柳宗悦邸と共通しています。

書斎と応接間を中心に：「私の生活の中心を書斎と応接間に置くように造ってもらいたい」との式場の希望は、高さをつけた書斎と応接間とが一体となった空間の創出に結実しました。濱田庄司作の陶板をはめこんだ暖炉と出窓に備え付けられたソファが

魅力を放ち、メインルームとしての風格を醸し出しています。

式場隆三郎家住宅は、隆三郎没後も式場家の人々によって大切に受け継がれ、現在も生活の場として機能しています。民藝同人たちが住宅のなかに作り上げた美は、「壊れた箇所は修理して用いる、日々の維持管理に気を配る」といった生活者の深い愛情や先人たちへの敬意によってさらに育まれ、今日に至っています。

参考文献：川島智生「式場隆三郎邸」藤田治彦・川島智生ほか『民芸運動と建築』淡交社 平成22年（2010）

【写真説明】1. 正面玄関周辺軒 / 2. 正面玄関周辺腰壁（大谷石） / 3. 1階書斎窓格子（貫の花菱は式場家の家紋） / 4. 玄関内部 / 5. 1階応接間 / 6. 1階書斎（応接間より望む） 撮影：日塔和彦氏 時期：令和元年（2019）12月

文責：山田真理子

市川市立図書館Webサイト

(URL : <https://www.city.ichikawa.lg.jp/library/db/1003.html>)

式場隆三郎 (1898～1965)

式場隆三郎 (しきばりゅうざぶろう)。精神科医、市川式場病院の創設者。1999 (平成11) 年、市川市名誉市民に選ばれる。

市川市立図書館の式場隆三郎著作の所蔵リストは以下よりご確認ください。



1. 文学と美術



1898 (明治31) 年、新潟県中蒲原郡五泉町 (いまの五泉市) に生まれる。1911年旧制村松中学に入学し、母方の叔父の影響で雑誌「ホトトギス」を知り文学に傾倒して、文芸誌、校友会誌の編集にあたった。やがて、旧制の新潟医学専門学校にすすむが、文学の道も捨てきれず、吉田璋也らと文化団体を結成、文芸雑誌を刊行した。そのころから「白樺派」の武者小路実篤、柳宗悦、志賀直哉らに師事、美術にも深い関心を寄せていた。美術に関しては、ゴッホやロートレック、ゴーギャンといったヨーロッパの画家たちを先駆けて紹介し、精神科医の立場から研究して伝記を書き上げるという偉業を果たすこととなる。また昭和二十年代

後半には、国立西洋美術館の基となる松方コレクション日本復帰運動をはじめ、その建設に多大な貢献を果たす。

美術関連の著作リスト



2.民芸運動へ傾倒

学校を卒業して、精神病理学の研究をすすめるかたわら、柳宗悦（やなぎむねよし）が提唱の民芸運動に参画してバーナード・リーチ、浜田庄司（はまだしょうじ）、千家元麿（せんげもとまる）、河合寛次郎（かわいかんじろう）、寿岳文章（じゅがくぶんしょう）らと終生かわらぬ親交を重ねている。



1925（大正14）年に木喰仏の全国調査に参加、1929（昭和4）年には欧州視察にて、ヨーロッパ各地の美術や民芸を調査。その後も民芸関係で沖縄や北京などに赴いている。民芸理論を実現させた建築についても語っており、1939（昭和14）年、式場病院構内に建てた自宅は、柳宗悦設計、浜田庄司建築監督によるものである。

民芸運動関連の著作リストへ

3.市川との関わり

本業の医学に関しては、市川との関わりも深い。昭和11（1936）年市川市国府台に精神病院（式場病院）を開院、その経営にあたった。また八幡学園の顧問となり、そこで少年・山下清（やましたきよし）を知り、その作品を世に出した。特に昭和20～30年代は、同じ市川に住む建築家、岸田日出刀（きしだひでと）らとともに地域文化発展の主導者として活躍された。

山下清関連の著作リストへ

4. 出版事業の展開

1937（昭和12）年、実業之日本社刊行の『四十からの無病生活法』はベストセラーとなる。

1940（昭和15）年、鱒書房のコバルト叢書より『処女のころ』『人妻の教養』も数年越しのベストセラーとなる。

戦後の昭和21（1946）年、日刊新聞「東京タイムズ」を創刊、出版ブームの先駆けとして東京タイムズ社内にロマンス社創立。娯楽雑誌「ロマンス」をはじめ「婦人世界」「映画スター」などの月刊雑誌を発刊。

1948（昭和23）年には日比谷出版社を創立、長崎の永井隆（ながいたかし）博士を知り、『長崎の鐘』などの出版に尽力した。

医学健康および一般教
養書の著作リストへ

5. 建築との関わり「二笑亭」

没後35年にして、式場隆三郎氏を再び世に知らしめたのは、1989（平成元）年、求竜堂から刊行された『二笑亭綺譚 五十年目の再訪』であった。（筑摩書房より1993年文庫版でも刊行）

昭和のはじめ、深川門前仲町の一角に狂人が造ったという奇々怪々な屋敷「二笑亭」（にしょうてい）が実在した。『二笑亭綺譚』（昭森社1939）は、式場隆三郎自らが精神科医の立場から取材した貴重なドキュメントである。取材には、建築家の立場として、谷口吉郎（たにぐちよしろう）氏も同行している。この当時の様子については、約40枚程の白黒写真から伺い知ることができる。昇れない梯子、使えない部屋、節穴にガラスを嵌めた覗き穴等々、常人では到底思いつかないような趣向の数々は、今で言うならば赤瀬川原平（あかせがわけんぺい）氏が提唱していた「超芸術トマソン」の元祖と言えるだろう。さらに式場隆三郎の描写も丁寧かつ的確、その場で案内されているような臨場感にあふれており、ポスト・モダンを予見していた氏の先見性が伺える名作である。